

昭和二十四年七月二十三日
昭和四十五年八月十五日
第三種郵便物認可
發行(毎月一回・十五日發行)

(通第二四九号)

慈光

第二十二卷 第二号

次

四海兄弟と同一念仏……………	近角常観……………	(1)
親心の照徹……………	福島政雄……………	(7)

目

琴平求道会にて……………	千葉崇憲……………	(12)
教壇に立つわたしの心……………	阿刀田令造……………	(14)
意訳『願生偈』……………	花田正夫……………	(21)

四海兄弟と同一念仏

近 角 常 観

曇鸞大師曰く

「それ遠く通ずるに四海のうちみな兄弟となす。同一に念仏して別の道なきが故に」

と。四海兄弟の真意義は、如来の本願には善悪をえらばず貴賤を論ぜず、男女老少をいわず、古今東西をわかたず、唯選択本願の念仏をもって、同一に救済せんとしたまえる大宝海に帰入して、念仏成仏するにある。

世界主義とか、人道主義とか、平等主義とか、言うことはただ漫然として、人類なるが故にとか、人間なるが故にとか、同一世界に生ずるが故にとか、万物同根なるが故にとか、同いようなことでは根拠がない。単に人類の異同を問わずとか、国土の別を見ずとか、言語、風俗の差別を認めずとか云うは、ただ偏見を払うばかりで中心を見出すことができぬ。

四海兄弟の真意義は、十方衆生と呼びたまえる如来の本願の下に、善人もその善の功を認めず、悪人もその悪を懺

としく選択の大宝海に帰して念仏成仏すべし」と。

実に如来の本願の前には、大小の聖人も、その自力修行の功を認めざるのみならず、全くこれをひるがえて、ただ弘誓の力を認むるのである。

願力成就の報土には、自力の心行いたらねば

大小聖人みなながら、如来の弘誓に乗ずなり

如何なる竜樹、天親の居士といえども、如来の本願弘誓の前には、自力の心行をなげうって、唯大慈大悲を仰ぐばかりである。歎異鈔に「自力作善の人は、ひとえに他力をたのむところかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず、しかれども自力の心をひるがえて他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生を遂ぐるなり」とあり、大悲のおめぐみの前には大小の聖人もその善を認むるあたわず、善凡夫も有漏(うろ)の諸善もその光を消さるのである。

実に如来の光顔巍巍(ぎぎ)として威神無極の前には、日月、摩尼珠光の燄明(えんめい)も、みなことごとく隠蔽(おんべい)して、なおし聚墨(じゆもく)の如くである。善人なおもて往生を遂ぐといふは、善人がその善が間におうて往生するのではない、その善をひるがえて、ただ御慈悲ばかりで往生を遂ぐるのである、ただ念仏ばかりで往生を遂ぐるのである。聖人であろうが、善人であろうが、如来の本願は専修専念である。自力作善が間にあ

悔し、如何なる修行も、その自力をなげうち、如何なる逆謗も、その邪見をひるがえし、有学無学を認めず、有罪無罪を問わず、学ありて何等の力もなく、罪また飽くまで恵まれて、十方衆生ただ如来の本願の下に同一念仏せんとする、これすなわち四海兄弟の鹹一味(かんいちみ)に入るのである。四河海に入りて一味となるがごとく、四姓(しせい)釈氏と称して同一佛弟子となるのである。これ佛教の根本義である。しかし仏教は単に四姓の別を見ずというだけの人間主義ではない、同一涅槃の醍醐味を味わわねばならぬ。正信偈に「能く一念喜愛心を発せば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。凡聖、逆謗ひとしく廻入すれば、衆水の海に入りて一味のごとし」とあるところである。

親鸞聖人は法然上人の選択本願念仏を歎じて曰く「明らかに知りぬ、これ凡聖自力の行にあらず、故に不廻向の行と名付くるなり。大小の聖人、重軽の悪人、皆同じくひ

ぐらいならば、選択本願はいらぬのである、念仏成仏は不必要である。故に如何なる聖道も權仮である、如何なる方行諸善も假門である。

像法のときの智人も、自力の諸教をさしおきて

時機相應の法なれば、念仏門にぞいらたまう

竜樹居士もその本意は南無阿弥陀仏である、天親菩薩もその自督(じとく)は帰命尽十方無碍光如来である。

恒沙塵数の如来は、万行の少善きらいつつ

名号不思議の信心を、ひとしくひとえにすすめしむ

十方恒沙の諸仏の、証誠護念のみことにて

自力の大菩提心の、かなわぬほどは知りぬべし

実に三世の諸の如来、十方の諸の仏陀、出世の正しき本意は、唯阿弥陀の不可思議願を説かんとおの思召である。これ悲願の一乗である、悲願のほかに二乗三乗を認めぬのである。二乗三乗は悲願の一乗に入らしむるためである。この悲願こそ実に第一義乗である、誓願一仏乗である、本願円頓一乘(ほんがんえんとんいちじょう)である。

聖道權仮の方便に、衆生ひさしくとまりて

諸有に流転の身とぞなる悲願の一乗帰命せよ

と仰せられたのが、絶対不二の如来本願の教たるゆえんである。

親の前には如何なる善き子も自ら誇りとするのではない
如何に親孝行の子も親に対してその孝を誇り得る者はない
又親が子を憐むにその孝たると否にかかわることはない
否、親に対して孝をなせりと思ふ者があれば根本に誤つて
いるのである。如何なる孝子も自己は孝なりと思ふ心があ
れば、これをひるがえして、親の大慈大悲に感泣すべきで
ある。古のいわゆる善なおとらず、いわんや悪をや、であ
る、善すらなお何等の功を認めぬのである、いわんや悪を
もつて防げとなさんや。孝子すら親の前にはその孝をひる
がえして大慈大悲を仰ぐ、いわんや不孝の輩、その不孝を
ひるがえして大慈大悲を仰がざるべき。孝子すら親はこれ
を憐愍してその孝の功を認めず、いわんや不孝の子に対し
てしばらくも眼を放つべけんや、不孝たるだけそれだけ捨
つことは出来ぬのである。

親鸞聖人曰く「初果（しよか）の聖者なお睡眠懶墮（す
いみんらいだ）なれども二十九有（う）には至らず、如何
にいわんや十方群生海、この行信に帰命し奉れば攝取して
捨てたまわず、故に阿弥陀と名づけたてまつる、これを他
力という」と。又曰く「願海は二乘雜善の中下の屍骸を宿
さず、如何にいわんや人天の虚仮、邪偽の善業、雜毒、雜
心の屍骸を宿さんや」と。即ち二乗の善人すらその善をと
どめず、いわんや愚悪の凡夫の悪を転せざるべき。実に歎

たまる本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてま
つる悪人もとも往生の正因なり」と。これ実に彼の因を建
立したまえる本意である。この本意を了知すること能わざ
るが故に、すなわち仏智不思議を信ぜざるゆえに、我等が
善きをよしとして邪定聚、不定聚の機となるのである。

歎異鈔に「一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざ
るなり、わがごころのよくて殺さぬにはあらず。また害せ
じとおもうとも百人千人を殺すこともあるべしと仰せのそ
うらしいしは、我等がごころのよきをばよしとおもひ、あし
きをばあしとおもいて、本願の不思議にてたすけたまうと
いうことを知らざることを仰せのそうらしいしなり」とある
が、所作（しよさ）の善悪に目がついて、悪業煩惱の我等
をたすけたまう本願の正意をいただかぬことをいましめら
れたのである。

宿業の如何によりて所作にあらわると否との區別こそ
あれ、実に罪惡深重、煩惱熾盛の我等、かくのごとき曠劫
以来常没（じようもつ）常流転にして、出離の縁のあるこ
となきものをたすけんとの本願不思議を仰ぎ信するの外は
ない。これ実に機法二種の深信（じんしん）である、正定
聚の機である、極惡深重の衆生の大慶喜心を得てもろもろ
の聖尊の重愛をこうむるのである。

一寸聞くと善惡を簡（えら）ばずということ、悪人正人

異鈔に「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」と
宣うゆえんである。

選択集には「もと凡夫のためにしてかねては聖人のため
なり」と仰せられた。正信偈には「本師源空仏教に明らか
にして、善惡の凡夫人を憐愍す」と云い、また「一切善惡
凡夫人、如來の弘誓願を聞信すれば」と云い、善というも
惡というも、結局、そらごとたわごとの、煩惱具足、火宅
無常の凡愚である。しかれども、その有漏（うる）煩惱に
よごれたの善をたのみにしているも、惡をかなしめるも
同様に憐みたまうのである。「善導ひとり仏教に明らか
にして定散と逆惡とを矜哀す」とのたもうもこれである。さ
れど善凡夫すら憐愍したまうのであるから、悪凡夫は最も
悲哀したまうのである。実に、悪人正機の本来他力の意趣
をいただかねばならぬ。

如來會（え）に曰く「彼國の衆生もしはまきに生れんも
の皆ごとく無上菩提を究竟し、涅槃の処にいたらしめ
ん。何をもつての故に、もし邪定聚は（しやじようじゆう）
および不定聚は彼の因を建立せることを了知すること能わ
ざるが故に」と。これ実に悪人正機の真髓である。

歎異鈔に「煩惱具足のわれらは何れの行にても生死をは
なるることあるべからざるをあわれみたまいて願をおこし

機（しよき）ということ、何とやらん意味のことなる
ような点があるらしく感ずることがある。これは善惡を簡
ばずということ、善くても悪くても可いということと思
い、悪人正機ということ、悪人ほど一層よいということに
誤解するからである。善惡をえらばずというは、いわゆる
我等が心の善きをよしと思ひ、悪しきをあしと思つてい
る。その如來の御心というは、我等は実に善というも惡と
いうもみなそらごと、たわごとにて、極重悪人、凡愚底下
のものなるを飽くまでも見捨てたまわざる誓願の不思議で
ある、この不思議を信じたてまつるのが往生の正因であ
る、即ち悪人正機である「弥陀の本願には老少善惡の人を
えらばれず、ただ信心を要とすとすべし。そのゆえは、
罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてま
す」すなわちこれである。和讃に、

不思議の仏智を信するを 報土の因としたまえり

信心の正因うることは かたきがなかなにおかたし

かく信ずる一念に、実にわが身の罪惡を自覺して、今ま
で我身のよきをよしと思ひ、悪しきをあしと思つたこと
の間違ひたることがわかるのである。実に「如來の御こ
ろによしと思召すほどに知りとおしたらばこそよきをしり
たるにてもあらめ、如來のあしと思召すほどに知りとおし

たらばこそ、あしさを知りたるにてあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」との仰せが、実に聖人御自督のきわみである。

全体善悪を簡はずということ、善くても悪しくてもいいと思うものゆえ、邪見におちいれば悪人正機というは悪人程よいということに誤解し、これを矯正（きようせい）せんとし、善くても悪くしてもよけれど、善くせねばならぬと思うて自力におちいるのである。

不思議の仏智をいただいてみれば、今まで善と誇れるも善にあらず、悪とおそるるも悪というに足らず。真の悪は罪悪深重、煩惱熾盛のわれらたることである。

「しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず念仏にまさるべき善なきゆえに、願をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」、全体、よくてもよい、悪しくてもよいという言葉が、なお善も悪も思いにまかせて出来るとの思いが本になってある。全体これが間違ひである。悪人程一層よいというて、なおなすべき悪の余地あるが如く思っている。極悪最下の者がこれ以上になすべき悪があるものか、たとい身に行わぬからとて、極悪最下と知らぬが誤りである。我等は地獄必定すみかであ

はからいにて人に念仏をもうさせ候わばこそ弟子にても候わめ、ひとえに弥陀の御もよおしにあずかりて念仏もうし候人を、わが弟子ともうすこと極めたる荒涼（こうりょう）のことなり」とあるのも、みな如来の御弟子なれば親鸞の弟子でない、真におのれをむなしくしたもうのである。「善信（親鸞聖人）が信心も聖人の御信心も一つなり」と仰せらるるも同じく如来よりたまわりたる信心だからである、したがって「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべし」との法然上人の仰せが「形を見れば法然上人、言葉をきけば弥陀の直説」である。「如来の教法を十方衆生にとききかむる時は、ただ如来の御代官を申しつるばかりなり」という謙虚な態度が、しらすしらすの間に、我等がためには、真に如来の化現として信仰したてまつる次第である。

本尊、聖教は如来の流通物（るつうぶつ）なればすこしも自尊したまわぬのである。そのかわり、有情群類、蠢々（しゅんじゅん）のやからまで十方衆生の中なれば、如来の大悲をこうむれかしと思召すのである。たとい食膳にのぼる魚鳥を見てさえ、せめて三世諸仏の解脱の幢相（どうそう）たる袈裟を着して、御縁をむなくせぬようにとの深き思召しである。

これ実に如来の本願たる十方衆生、釈尊の教説たる諸有

る。また悪くてもいいとか、善くせねばならぬというは、全体我等が善く出来ると思っているのが誤りである。

世間的に善いとしたところが、それを善として誇りとしているが間違ひである。またそれをなさんとす^はれ出来るもののように思っているのが間違ひである。我等が如き極悪最下の者を見捨てたまわぬ本願の親心を頂く善にくらべて見れば、善と名づけられるべき善は無いのである。

聖人最終の法語としての御述懐に

よしあしの文字をも知らぬひとはみな

まことのころなりけるを、

善悪の字しりがおほ、おほそらごのかたちなり

是非しらず、邪正もわかぬこの身なり

小慈小悲もなけれども

名利に人師をこのむなり。

これ実に聖人が、如来の本願の前に、至心信樂おのれを忘れたまいたるかたちなり。実に如来の本願の前には、善もなく悪もなく、貴賤縋素（きせんしそ）を簡はず、男女老少をいわず、造悪の多少を問わず、修行の久近を論ぜず唯弥陀の誓願不思議を信じたてまつりて、念仏したてまつるばかりである。実に念仏成仏は真宗である、同一念仏して別の道無きが故に、である。

聖人が「親鸞は弟子一人もたす候、そのゆえは、わが

衆生が、やがて信心を通じて自然に顕現したまうのである。

ここにいたりて四海兄弟以上になりて、あらゆる生きとし生ける者みな、如来の御親心を頂くべきものである。されど真の兄弟の名告りは同一念仏に入りたるときである。大悲の招喚が聞えた時である、同一鹹味（かんみ）に入りたるときである。故に過去をかえりみては「たまたま行信を獲ば遠く宿縁をよろこべ」といい、未来を望みては「一切の有情は皆もて世々生々の父母兄弟なり。いずれもこの順次生に仏になりてたすけ候べきなり」とある。この如く、三世に通じ、十方を貫ぬき、あらゆる衆生、大悲招喚の下に、唯南無阿弥陀仏と、真の同胞、真の兄弟を名告るべきである。

○安樂仏国にいたるには、無上宝珠の名号と

真実信心ひとつにて、無別道故とときたまう

○如来清浄本願の、無生の生なりければ

本則三三の品（ほん）なれど一二も変ることそなき

（求道誌、第十卷七号）

親心の照徹

(阿闍世王について)

福島政雄

阿闍世王のことについて、親心ということ申述べて見たいと思います。阿闍世王が苦しみ悩んでいました時、小細工をする者が五六人も出て来ましてつまらぬ理窟を云うのであります。阿闍世王は五逆罪をおかせば生きながら地獄に墮ちると聞いて、自分は今にも地獄におちるだろうと苦しんでいます。そこに次々に大臣が出て来てはいろいろの理窟を述べて慰めようとするのであります。

一人は言います。大王は地獄に落ちると苦しんで居られますが、地獄なんかありません。誰かその地獄を見て来たものがありますか。誰も無いでしょう。地獄は無いからです。私の先生に非常な名医があつて、その先生は——一休業報などあるわけのものではない、あるように考えるのが間違ひである。黒業なければ黒業の報はない、白業なければ白業の報もない。黒業白業の報は決して有るものではない、と説いて居ります。と言って慰めるのであります。

後大きくなつたならば父を殺すと云つた。しかるに父は私の私を育てて下さつたのである。それに私はその情深い父を殺してしまつた。こんなものは阿鼻地獄に墮ちるにきまつている。それで自分はこんなに苦しんでいるのである」と言へば、その大臣は「人間には前世の悪業の余りがあります。前世の余業で生死をうける事になるのであります。御父上頻婆娑羅王(びんばしやらおう)も前の世の余業で此の世を終られたのであるから大王の罪ではないのであります」

かように次から次へとすすめて、理窟で阿闍世王を慰めようとするのであります。

或る大臣は非常に理窟を述べます。

「一体地獄々と云われるが、その地獄の説明を致しましょう。地とは大地である、獄とは破るという意味である故に地獄とは地獄を破ることであつて、つまり地獄というものは無いことになりませぬ。罪報はありませぬ。又、地は人間の人、獄は天上界の天の意で、父を殺した為に、人間や天上界に生れることを聞いて居ります。また地獄の地は命、獄は長いという意味で、殺すことによつて命長く此の世に生活することになる。大王よ、決して大王の云われるような地獄はないのである。麦の種を播けば麦が生ずる、稲を植えれば米が生ずる、人を殺したら人に生れる、とい

又或る一人の家来が来た時、阿闍世王は「自分は体も心も痛んで苦しむ。自分は癡盲であつて、悪友に近づき、正しい道の父親を殺した。父親母親仏弟子に対して悪業を起したならば、必ず阿鼻(あび)地獄に墮ちると聞いていたので、自分は今こんなに苦しみ悩んでいる。これを救済する医者は無かるるか」と、痛切な悩みを訴えるのである。すると大臣は「一たい出家の法と、王法とは違ふのであつて、出家は一匹の蟻を殺しても罪になるが、王法では一國の王は父親母親を殺しても罪にはならぬ。故に王法と出家の法と區別してお考えにならねばなりません」というのである。それでも阿闍世王は肯くことが出来ないのであります。

また次の大臣が出て訊ねると、阿闍世王は前のように自分の苦しみを訴えます。「わが父は非常に情深い方であつた。相師(うらないし)が自分を占つて、この子は生れてうようなものであります」と云つて阿闍世王を理窟で慰めようとする。しかし阿闍世王は理窟では慰められないのであります。

今一人の大臣は「一たい殺すということに、本當に罪があるであろうか。斧が樹をきつても斧に罪はない、鎌が草をきるが鎌に罪はない。刀が人を殺しても刀に罪はない。毒をもつて殺しても毒に罪はない。一切万物決して罪はない。斧が木をきつたからとて、鎌が草をきつたからとて、斧にも鎌にも罪がないように、大王にはちつとも罪は無いではありませぬか」と理窟つくめに落ちつかせようとしませんが、阿闍世王は少しも落ちつくことが出来ないのであります。

これは印度三千年前の物語であります。この大臣たちが阿闍世王に言っていることは、そのままに今日の人が言っていることでもあります。何か人が苦しんでいる時、理窟で慰めようとする。何とかして人生問題の悩みを理窟でごまかそうと私どもはしているのである。併し人生問題そのものの苦しみは、理窟でどうにもなるものではありません。理窟を聞けば益々苦しみは深くなって行くばかりであります。つまり私どもの人生問題の苦しみが大きくなれば、哲学などでその苦しみが解けるものではない。西洋の哲学、仏教の哲理、唯識論(ゆいしきろん)や華嚴(けごん)、

天台の教理などで、身につまされる人生問題が解けるものではないのであります。そうすると、この問題はどこから解けるか——ここにいよいよ最後にあらわれたのは香婆大臣であります。

香婆は「大王、あなたは安眠ができませんか」と訊ねる。すると阿闍世王は「香婆よ、自分の病氣は非常に重い。法の如く国を治めた正しい我が父を、横ざまに逆害したからどんな良医でも、どんな妙薬でも、どんな呪術（じゅじゅつ）でも、自分のこの病氣に本復はむつかしいと思う。

昔、賢い人からこんなことを聞いた——その人の身と口と意とに悪業を作ればその人は必ず地獄におちると。自分は今どうなっているかを考えるとき、どんなに慰められても安眠することは出来ない。これを治す何ものもないであろう」と訴えるのであります。

その時香婆は「善い哉、善い哉」と大王を賞めます、そして「大王は罪をおつくりになった。それは仕方がない、しかし、今大王の心には非常な後悔と慚愧の心をおこしになって居られます。諸仏世尊はここに二つの正しい道があつて、これで一切衆生は助かるのであると言われています。それは、一つには慚（ざん）であり、二つには愧（き）である。慚は自ら罪をつくらない、愧は人に罪をつくらせない。慚は自己に恥じ、愧は世間に恥じる。慚は人に恥

す。母親から静かに看護されている阿闍世王の胸に、ありありと父の世にあつたさまがはつきり甦（よみがえ）って来たのであります。外からは母の看護、内からは父の声が響いてはじめて積尊のお膝許へ往こうということになるのであります。もう一步突込んで申しますと、この世を去った父親、此の世にあつて黙って看護してくれる母親に促されて、阿闍世王が積尊の許に行こうというのは、阿闍世王にこの時すでに仏陀の久遠の声が聞こえてきた、ということになるのであります。

これは単に阿闍世王の問題ではない。私自身にそんな事を感じますのであります。両親がこの世に在った頃は、しきりに父親にたてつき、毒矢を向けて来たのである。私がかつて来たとき、母は非常に心配して熊本から東京まで来て一心に世話をしてくれたのであります。私は有難くないことはないが、一向に感謝しないのであります。久しぶりに遙々と母親が来て世話をしてくれるのでありますから、嬉しいにはちがいないが、何かと隔て心があつて打融けない。自分自身でも満足しないし、といって友人にもあまり打融けて話すことも出来ず、いい加減なことを話していたのである。或る日夜おそく帰って、仏壇に燈明をあげて、その前に座して大無量寿経の五悪段を不図開いたのである。そこにはこんなことが書かれてありました——此

じ、愧は天に恥ず。これを慚愧と言ひ、無慚無愧は人でない畜生であると。此の慚愧が人間に一番大切である。大王は今この慚愧の心を起こして居られます。大王はこの病氣を治（なお）す人は無いと言われますが、その病氣を治す唯一人のお方がある。迦毘羅（カピラ）城の淨飯王の子、悉達（シツタ）太子は覺りを開かれて居ります。この仏の世界のお力によって、必ず大王は救われ給うでありますよ」と言つて、香婆が積尊の御許に参られるように勧めて居る時、天上より声が響いて「自分は汝をあわれむが故に勧めてみちびくのである」と言う。香婆は仏世尊よりほかに大王を救う人は無いと説き空からは汝をあわれむからその道を勧めるのであると喚（よ）ぶ。阿闍世は非常に怖れぶるふる慄（ふる）えて空から聞ゆる声は「たいどういいう声か、誰の声であるかと訊ねると、又空から声が響いて「我は汝の父親婆娑羅（ビンバシヤラ）である。汝は香婆の言うことを聞けよ。邪慳（じゃけん）な他の臣下の言うことを聞くな」と。ここに阿闍世王は悶絶して地に倒れるのであります。

これは非常に味わい深いことであると私は感じているのであります。

空中から声が響いて来たというのは、父親婆娑羅王の生前の教が始めて阿闍世王の胸の奥から響いたことである。この世の中にわからぬ人間が居る。それは大へんな怠けものである。父母が見るに見かねてもう少し家業に立ちかえてはどうかと意見すると、その子は眼をむき出して怒つて口答えをする。産みの親子でありながら仇同志のようで、こんな子は無い方がよい——と。その時私は此処を読んでこれはたしかに私のことであると感じました。

「善人は善い事を行なつて明るい世界から明るい世界に行く。悪人は悪い事を行なつて暗い世界から暗い世界に行く。誰も知らないであろうが、仏のみはこれをよくしるしめすのである」

という。これを読んで二十七歳の私はこれは私の事であると感じて仏前に泣き伏したのであります。其の時から自分の心が開けはじめました。今日八十歳の老齢でこれを考えますれば、母はこの子を何とかして正しい道に生きさせようと、熊本から東京までをはるる三百里を上つて来て私と一緒に苦しんでいてくれたのである。私が淋しそうにしていると、どこどこまでも理解してやりたいと、黙って誠をつくしてついて来てくれたものである。五十五歳までの母の生活を今から顧れば、その時の私は一種の阿闍世王であり、母は韋提希夫人であった。苦しみの中に子に対する務を沈黙裡に果しているその眞実心は、今現に母の五十年

忌となつて振りかえれば、その母を通しての久遠の親のまことを切実に感じます。私は生きた仏の説法を聞かされたのであります。空な仏ではない、活きた仏、活きたまことに生かされはぐくまれてゐる。私と共に悲しみ、私が迷へは共に迷ひ共に生きて下さる廣大無辺のお慈悲が、私の上に生きてゐる親を通して響いて来るのであります。

それではお前はいつもそんなに親のお慈悲を感じてゐるかと言われれば、私はかねては念仏を申さず、親をも思はない。そのような私をどこどこまでも怒んで、久遠の親心のまことはその私の生命と一つになつて、私の生命に徹して下さるのであります。

韋提希夫人が空中からきこゆる父親の声を聞いて悶絶する阿闍世王を見て、静かに薬を塗つてゐるのは、三千年の昔の他所の問題でなく、私の身の上の問題である。母はつねにこの私の生命と一つになつて動いてゐるのであります。どこどこでも私を理解し、私の生命と一つになつて生きて居るので、それは説法する母でなく、共に苦しみ、共に悲しむ親の血の涙の苦しみを通して、そこに私が生かされる御恩をいただくのであります。

(昭和四十四年十二月六日稿)

琴平求道会にて

母の生命のありたけが乳として流れ入つて子の生命となる。母にいだかれた子は無心に乳房にすがる。そこには疑いもおそれも気がねもない、安心とはこのことである。

ひとたび母の乳房をはなれるところから人生の不安と苦惱がはじまるといってよい。智慧があればあるだけ、欲望が多ければ多いだけ、不安と苦惱は大きいであろう。もはや肉身の父母によつてもみたすことのできぬものとなる。父母もまたおなじ苦惱を持ち、生老病死の苦をどうしてみようもない。

この人々にとつて安心立命を得る道は千差萬別であろうが、いきつくところは阿弥陀仏の大生命のありつたけが、「南無阿弥陀仏」として与えられてゐる。「ただ念仏して」とは、幼児がひたすら母のいのちの乳をすうように念仏一つとなつたとき、かのみどり子のごとく弥陀にまかせたてまつつて自分のはからいのすたつた安心歓喜の境にいたることである。名号六字とはいかなる苦惱の衆生をも捨てたまわずして、悪を転じ徳となす仏の生命がわがうちに入り

吾兒がおくつき

左千夫 歌集

おくつきのおきなみ霊を慰めむすがと植ふる雞頭の花
秋草のはなのくさぐさ捧ぐれど色はひと日を保たず寂し
幼どち姉と手をひき横歩み舞ひそばへしが目に消えぬかも
数へ年三つにありしを飯のむしろ身を片寄せて姉にゆずり
き

いにしへの聖人聖人の言はあれど死ぬといふことは思ひ堪へずも

み仏に救はれありとおもひ得ば歎きは消えむ消えずともよし
むら肝の心干切と破り果てばわが悲しみは少し足るべし
夕雨にこほろこほろぎうら悲し新おくつきの雞頭がもと

千葉崇憲

みちてくださつて、自然と念仏とあらわれるのである。この生命は智慧によつて解しようとしても不可能であること、ランプの光で月を見ようとするに同じである。月を見るは月の光によらなければならぬ。ひたすら仰いで称えるところに、如来の生命が顕現し流入するのであり、そこに如来と我(菩提涅槃一仏)と(煩惱生死一我)とが離れないのである。

××× ×××

八月末、京都本山に参拜、御開山さまにごあいさつ。帰途、竜野の光善寺の故・一羽大雲伯父に参る。その折、伯母より、広間つる女のことを承り、その歌を抜き書きした追弔記念の印刷冊子をいただく、伯父からのお土産かとありがたく思われる。仏縁法縁とは不思議なもので、こちらの心はうすく浅ましいのに、深く大きなものをいただくことである。

広間さんは若いとき女だてらに道楽の限りを尽くし、郷里にもおれず、門司でくらしていたが、行きつまってどう

にもならなくなり、とうとう死のうと覚悟を決め、親は竜野へかえし、家財をしまつし、七輪まで近所へあげ、大家にもあいさつして、出かけたところで知人から、死ぬまえに一度きいてみよとすめられ、はじめて聞法したところ、なんと自分とそっくりな道楽女の話をきかされ、ついひきつけられて、まず死ぬまでに聞きぬいてとなり、それまで信仰していた「イクヤマ」さんに、「これから阿弥陀さまのお世話になるから」と、ことわり状を出し、西村法劍、松島善海、両和上について聞きぬいて信心をいただいた。その聞法の真剣なことは、寒中にも汗を流すという有様であったという。のち竜野にかえり、聞法ひとすじ、そのみちびきと感化によって多くの同行をそだてた。

おつる同行は、どなたのお説法を聞いても、どこかに親心を聞くことができるというてよろこんだ。和上がたから「いつも／＼親心を聞くばかり……」とおしえられ、「かかるものをおたすけ……かかる、かかる……」と泣いて喜んでおられた。暇を見つけると袖を引いて仏法を語り、世間話になると居眠りをした。昭和三年五月十日七十二歳で往生。

よろこびの うた

聞いて見りゃ身の毛のよだつ悪人を、大悲六字のなわに
つながれ

教壇に立つわたしのところ



阿刀田 令 造

身はここで、心は弥陀のところで、抱かれてかえる親のふるさと
根かぎり聞かしたはみなうそで、聞かせられたがまことなりけり
ありがたや 鬼もあざむくこのばばを たすけたまうは
弥陀ご一仏
空の月 浅いわたしのにこり江に 宿せし月のご恩とう
とや
宿られてみればにこりもはずかしい ならうことだけき
よきながれに
泣く涙、泣かせる方があればこそ 恩を恩とも知らぬこの身に
とのうれど わが声とてはさらになし たすけし弥陀のもれいずる声
極楽としゃばと境の白道を進むわたしの足もとは水もさかまく火もゆるる、そこはまたおたすけのお手のうち
信心も傾解するの もわしや知らねども、とうときめぐみのみ仏の お助けありしわしの身は、今ははや極楽の次の間じゃ

人格者であると自信が出来るならば何のこともない。人格の感化が教育の本質であり、指導、誘掖(ゆうえき)が教育の内容と見られ得るからである。しかしその自信が湧かない場合はどうすればいいか、恐らく自己を苦行者の立場に置くよりほか道がなかる。人格者たらしとする正しい努力を買って貰うだけであろう。

しかしこの精進、奮励が何処まで続くであろうか。人はともかく、わたしなどはややもすると安逸に着かんとする遊墮にふけらんとする。人格者のほしいままになし得る妙境に一步ずつ近づいていることを覚るよりも、かえって右の苦行に堪ゆべくもないことを知らして貰うのみである。バベルの塔を建造しつつあるのたわごとをくりかえしていることに気づかされる。

もっとも平日は人格の向上を味わい得ないこともなからうがこれをもって魂の浄化と解するのは軽卒である。試みに汝の前に提婆を出せ、ユダを現わせ。果して釈尊の如

く、またキリストの如く、胸裡澄みて月の如くであり得るであろうか。私が聖者の姿をなし得る時はまことに短い、人から裏切られないときだけである、人から侮蔑を受けなるときだけである、すべて境遇が順調に運んでいるときだけである。そのうえ私には自己を高く評価したがる悪癖があるので、人格の向上を表面的に軽く味わうと、不遠慮にも修養の効果見えたりと、したり顔をする。聖者の道さまで至難ならずと飲称する。しかしその聖者、危いかな、一度官命下りて期せざる方面に職を遷されたとしたならば如何、さらに職を奪われたとしたら如何、病魔襲い来って、その苦しみ到底抜き得ないとき如何。月明は忽ちにして雲霧におおわれ、ひ人を怨み世を咒う。これ自認の聖者にふさわしい相貌である。こう見てくると浄化など、自己を値ぶみするならば、これ全く自己に盲なるものである。こうした真の聖者への道では疲れる、だから続かない。また如何に聖者とおのれを高うして見ても、そのうち兜

が自分自身には見られる折が少くない。即ち何時でも隙があるにはあるが、隙を見得ぬほど我執が熾烈であるため、幸にも聖者になりすまし得るのである。聖者よ、試みに出来る限りの虚心坦懐といった心もちをもって自己を正視することを努めよ。これを努めて愛欲名利に沈没しつゝあることに気付かぬことはない筈である。しかし気をまわして貰ってはこまる、今はいたずらに愛欲名利を真正面から非難しようとするのではない、いわんや正しい愛欲名利をばぐくむことよって家産は増し、産業は進み、土木起り、つまり国家社会が成立するのではないかなどという、全く自己から切り離れた議論にかかわらんとするのではない。ただ私は、この二者の支配から脱れ得ないによって心つねに平らかでない、この平らかでないことが衷心堪えかねるといふだけの告白をなしたに過ぎぬ。

わたしの自我はあまりに強い、チョットでもそれに触れられると磯巾着(いそぎんちゃく)の岩にしがみつくの狂態をあえてする。「わたしは弱い、またにせ者であることもよく判る」と告白している言葉の下から、もし人から、「女のようにじゃないか」と非難せられると、必ず開きなあって「そうではありましようが」とやり出す。或は「だから今すこし工夫をしよう」と弁明する。実にこうした場合打たる釘のように我(が)を引込め得ない、それどこ

を無きものにしてしようかと邪見の心が動き出す。程経て夫君は妻をつれて旅に出た、たくみがあることとて夫の言葉は何時になく情がこもる。妻はもはやたくなでない。語らいつつ或山中を通る。あだかもよし夫は妻の後を歩む、夫は意を決する、力をこめて妻を崖下に突き落とす。夫は何くわぬ顔して江戸に帰り、さきの女と晴れてその日を送る。

しかし妻の運は尽きなかった、絶え入った息を再びふきかえした。その瞬間、妻は電にうたれたように感じた。わが嫉妬が遂に夫君をして非望を遂げしむるに至ったのであると、ひどく箭が自己の胸奥に向いた。妻はここに自己のあさましい正体を真に愧じた。幾日か経過した。受けた傷もほぼ癒えたので、江戸に帰った。夫君を訪ねて罪を謝するがためであった。時刻などはここに用がない、とにかく夫君は今日も昨日の如く低い快楽にふけっている。そこに無き数に入つたはずの妻が突如としてあらわれる。夫は魂が身に添わぬほどに驚く。しかしこの場になって逃げるべくもない。ままよどんな光景が演出せられようととも悪度胸をきめる。併しこはまた驚くべし、妻はしきりに自ら愧じる。夫はむしろ座に堪えない。あだし女とて同じい。二人は前後して家を滑り出た。妻はすこぶる怒り、また数日がすぎた。二人の死屍が所が違って漂着した。妻はさらにその罪をしみじみ感じた、緑の髪を今は惜しむに足りな

るじやない、持ち合わせのわが殻があまりに小なりと思えば更にこれに何物かを加える、わたしが生徒をおのれの根城によびよせて後、縷々詰責(るるきつせき)を試みるが如きも、また我上我(が)のうえに(が)を加えた態度である。思えば愧ずかしい限りである。

またここに一つの心もちがある。弱いもの、罪のものと落ちこめば、否、手放せば日常の生活と並行しなくなる。この弱さ、この罪をもつて教壇に立ち得ようかと論理が開展していかねばならぬの考えから、強いて目をふさぐことにとめる。とにも角にも、七八分正体をみつめ、遂にあわてわが殻に逃げこむのはわたしの性分である。

連れ添う夫の甲斐なきをうらみ、遂に世をはかなめる女が、真夜中、その家を抜け出て近い川瀬に身を沈めようとした刹那、眠れる子の啼き声にハット気がつき、御慈悲にめざめたという話を聞いた。何かで読まして貰った貞運尼のことも、この場合忘れられない。

貞運尼の俗の姿は長唄の師匠である。江戸の生れと聞く時は幕末か、よく知らない。師匠ははじめ夫君を迎えた。二人の間は世の常のようであった。ところが夫君が天魔に魅せられ、やがてあだし女にうつつを抜かすようになった。妻はこれを知ってしきりにこれを嫉妬し、苦言を呈するが、夫君は無明の酔から醒めようとしなない。むしろこれ

い、二人の菩提を弔わんとて直ちに出家した。

しかし私はそうはいかぬ。必ず二分か三分かが残る。千仞の功を一簣(いつき)に欠くとやら、致し方が無いようなものの、まことに残念である。それでは自己の追求を更に熱烈にやるのか。単にそれだけでは道は開けない。死地に急ぐだけのことになる。右を見て火、左を見て水、後に狂う猛獣を見たからとて必ずしも仏の招喚が前面に聞こえるものでない。外的圧迫には人は堪え得られるものでないから何とかして生きようとあがくのは一般であるが、力が尽きはてると、むしろこうしたのであるが一生と奴隸の境遇を甘受することも出来る。これを要するに光明界への躍進は自力の能くするところでない。善知識の化導にまたねばならぬ。聞法の功德に浴さねばならぬ。

私は右の消息を明らかにするためにフランス革命を借り、どの史家も革命の勃発を説くに第三級の窮状をもつてするこれはもつともである。しかしして窮状の原因、その一を制度から来るものとする。その二を天然から生ずるものとする、精しく云えば時は専制であつて人民は法律上平等の地位を恵まれていない。天また人につらく、満腹し得るだけの五穀を供さない。外的事情がかくの如くにして自己の脚下に気付かぬはずがない、生きんとあがかぬものはあるまい。如何なる無自覚者も自覚に入らぬはずはないと主張

するならば、これは明かに短見である。試みに東洋に興亡した諸邦を見よ、外的事情に革命前のフランスと酷似したものを認めることは困難でないが、必ずしも自己存在の意識を明瞭にする機縁とはなっていない、多くは奴隷の心境に墮してあやしまない。或は自棄して、自己の魂に点火せんとする聖なる努力をしようと思わない。もっとも右の心境は従順の美俗に深く根底するものであると理解させる所が多いため、由来ながく讃歎するに値したものであった。しかしこの根底から来た従順か、無自覚から来たたつた従順かを判別する唯一の標準は実行者の態度にある。一つは現世の不自由を認めてのちの自由境の開拓、換言すれば、不自由の自由を味わった所から来たのであるから、これには消すべからざる光がある。一つは不自由の下敷になつての単なる「あきらめ」であるから、すべて眉宇の間に曇りがかかる。これを要するに外的事情即光明でない、また自覚でない。没落は没落である、藤村操はやはり巖頭に立たねばならぬ。私は現代の教育にもこの消息を認め得られると思ふ。現今の教育界には自覚から要求へとすでに足を踏み出した部面と、依然として過去の伝統や因襲に支配せられつつある部面とある。前者に対しては聰明にその要求の適否を判断し与うべきは与うべしというよりか外に道がない。即ちナポレオンの教育である。後者の場合は如何にな

私は感化が生徒に及ばぬといつてしきりにかこつた昔時をひそかにしのぶ。性もとより善である、赤誠をもつて導けば如何なる不良性も一掃し得られない筈はないと気色ばんだ古をまたひそかにおもう。ア、何という僭越であつたらうか。何のたのむところあつて、右の誓約を暗黙裡に成し遂げたことであつたらうか。私はこの僭越に今は面を伏せる、私などに感化、指導の力などが微塵もありやしない私としてはこの事実を忘却し易く、常に優越を感じたがる不とき者であるという点を必々さとするだけである。

所詮、御慈悲に夜が明けて見ると、教育は指導ではなくなる。高い所から襟首をつかんでむりやりに引き上げるような態度ではなくなる。学生、生徒の世界に一味になるという態度となつて行く。問題は自己の信念をくぐつてさばかれることとなる。かくあるべしと深刻に迫り行く概念主義が減り去ることとなる。しかし誤解してはならない、一切の放縦に目をふさぐ所以ではない。否、放縦の如何なるものなるかを極めて明確に知らして貰うことになるから、それを矯正して良学生、善生徒となすの結果の方に何等拘束されることなしに、放縦に関して骨に徹するの言説が湧く。教育圏内にあらしむることが、お慈悲にめざめる所以でないことが明確に判らして貰えば、世間の意見に超然として、同者を圏外に去らしむるの勇悍なる立場が生ずる。

すべきか。無自覚は無自覚のままにあらしめよ、旧道徳の支配に放任せしめよではあまりに不親切である。正当に欲すべきものを発見させるべきである。つまりルソーの役目がここに有要になつてくる。

とにかく新境遇への飛躍にはルソーの助けを借りねばならぬ。否、善知識の化導にまたねばならぬ。

それにもかかわらず、私のつむじは常に善知識といった尊い存在を蔑視したがる、仏、世尊の聖名さえ疎外したがる、何というおろかさであるるか。

若し教育の意義を知識の伝達だけに限定し得るならば、またことが至つて簡単である。しかし私にはどうしてもそれだけよりか領域が広いように思われてならない。魂の安定のところまで掘げられねばならぬように思われる。これを簡単に云えば宗教が体、教育がその用であると思われぬ。しかしこの思惑が幾分是なりとし、そしてそこに自己自体が人格者たるべくあまりに荒削りである、利欲のみに倣倣であることを知つたならばどうする。これ実に絶体絶命でないか。妥協か、欺瞞か、この世界を逃れるか。つまりここに問題は、罪惡の深重なるもの、いずれの行も及び難いもの、地獄は一定自己の住み家と知つて、かの教育の聖業にあたり得るか、この没落から如何なる教育が展開すべきであるかである。

こう述べて来ると、眞の教育は親鸞宗の上に築き上げられねばならぬことが判る。

卑俗な見解から、他力を解して、他に拠るとなす故に、生徒は教師に、人民は君主に無条件にすがりつき、全く努力精進をしないものとさげすむ。しかしこれは他力の眞意でない。他力とは人に頼るといふのでない。自己に対する絶対不信任から出発し、人ごとく信頼をつなぎ得ないことを知つた實際の経験から、否、その経験が促す無限の寂寞からお慈悲に気づかして貰つたこと、阿弥陀仏の攝取の洪恩にめざめたことを云うのであつて、何処にも手をこまぬいて成果をまつという意義はひそんでいない。但しこの洪恩を知つてもなお弱い人情の持主であることは、以前とちつとも異なる所がないのであるから、恩に甘える気にはならないことがあるまいが、それですら直ちに済まぬの一念が発起する。いわんや平然として横着をあえてするの態度に出すべきではない。時に私共はこのままの救いであるという点に執着して、はからわぬが如来の思召しにかなう所以と合点し、遂に不知不識放縦の地獄に緊縛されることがある。それかといつて「いかにからはからわぬとて、こちらで膝をすすめないでは、たとひ御仏でも策の施すようもあらせられぬ、矢張り自分相応に断悪修善に留意すべきである」といった歎異鈔にも歎いていらるる心意をよしとする

ものではない。とにかく今言わんとするところは無上信心の発起よりおのずとこみあげてくる内心の緊張味である、これ他力である。このように観察してくると、教育を他力的に考えられないことはない。他力的に考えるときはひどく放縦に墮するものでないことが明かになる。不良学生が放任せられ、学校は感化院と異るところがなくなるといった風にならないこともおのずから明かになる。

私は近來の教育趨勢として総て実験的であることを喜ぶものである。実験によって学生生徒の興味をよびおこし、更に十二分の満足を与えることの智識を確実に得させるうえに、これに若く方法あることを知らない。また気分を尊びはぐくむことをよしとするものである。しかし眞の生活は興味と気分とだけでは到底発見することは出来ない。否この面に没頭せしめたために遂に高い世界の實在を忘れてしまわせては、これは教育上ゆゆしい大事である。だから私はこの趨勢に直面するにつけ、興味や気分に対する努力が教育をする上に全幅でなく、否この二者が宗教的方向をつけられてはじめて所を得るといふことを主張したのである。要するに現代教育の弊害は、無自覚であつたさきの日の弊ではない、今やようやく眞の方向を発見したが、その努力にまだまだ到らないところのあるによつて生じたものであることを知らねばならない。

望してやまない。

以上に於いて私は「親鸞の教が如何の意にて一切是認か」を批判した。しかしここにまた懺悔によつてゆるされるというところに腰をおろし、恬(てん)として放縦をあえてするものがある、これもつつしみのない話である。思うにこれは真相を語つた場合にゆるされるといつた迷信の所産である。いわゆる真相を縷々と告白した場合、胸のすいた些些たる経験から来たつたものである。しかしこれは因果關係が前後している。ゆるされることが先に立つての告白でないか。眞の懺悔はそうしたものでない、済まなかつたという御仏に対する徹底的叩頭(こうとう)であるから、ゆるされると否とは全く問うところでない。

人は常に二つの型において生きてゐる。一はこうしたのが人生であるといつて眞実の圈に全く触れることを思わぬ者である。一は眞実の圈内に収容せらるることを熱望する眞摯な人々である。前者はここに要がない、後者についていう。後者にも更に二つの型がある。否、二つの型がおのずから現れてくる。一は眞実圈を含めて大円を描くものである。一は嘘いつわりは云わない、然し都合のよい部分だけを吐露するので、これは眞実圈内に小円を描く者である。しかしして前者の著しい例はルソーであろう。このままであると啖呵(たんか)をきるに馴れている思想界一部の

これを要するに、もしここに人があつて、親鸞の教育は一切を寛容するにあるという点から出發する、不勉強もゆるされる、不品行も咎められない、無節制でもよろしいとあるならば、私はその人の僭越にすこぶる驚かねばならぬ。「ゆるす特權」は御仏だけがほしいままにし得るものである。私としては御仏の御慈悲にめざめ得ない頭愚を愧じるだけのことである。頭愚の私のために悲泣して居らるる御仏の前にひれ伏すだけのことである。恵みに懐かれた心そのまま、兄弟としてもを言うだけのことである。つまりゆるすことも出来なければ、拒むことも出来ぬ。すべてその社会、その圈内の道徳、約束に従うよりほか、私には取るべき道がない。圈内に立つた方が御方便の尊き催しに与り易いかどうか、それも判らない。唯、自己の便宜を主として案出した理想に照らし、理想の尺度からはみ出しているものを、強いて圈内に立たしむるは、盲者に全景を露出せしめ、それをば鞭をもつて乱打する暴行の如く思われ、それは見て快くない。信仰の世界にはこの種の排斥はない。私はこの意味を云うのではない。とにかく、信心徹到した場合、かれは無碍の一道を濶歩することが出来る。天神地祇も尽く敬伏する、魔界外道も障碍する余地がない。かくの如くんば、何処に放縦の生活が姿を宿すことが出来ようぞ。わたしは教育面がかく整理せられることを熱

風もルソーの亜流であろう。後者はほかに例をとるまでもない、利巧にして打算に富む私自身である。しかしここに二者に対する善惡の評價は無用である。が、眞実圈上に全くそれと等しい円を描き得ない点は二者一様である。

そこで問題がついで起る、どうすれば眞実圈上に同じ一円を描き得るか。この問はわけがない。自己の罪の姿をば明瞭にみつめ得る人のみよくし得る特權である。精しく云えば仏陀の光明に照護せらるることなくして自己のあさましさが判るものでないから、また眞実の信者のみがほしいままになし得る行為といつてもよい。つまり懺悔は描く場合にこみあげてくる没我境である。更に云わば娑婆の縁つきて力なくして終わるときはじめて眞のさとりに達し得べく、その間は耳四郎の盜癖も根底的に矯められない、時々宿業の引廻しをこうむることがある、即ちこれに対する慚愧の一念これまた懺悔である。しかるに懺悔をこう見ないものがある、ルソーの心地をもつて極めて近くにしかした不行跡をば笑いながら陳述する、これは青年に多い。しかしこれは他力宗が責めを分つべきものかもしれぬが、これは決して眞の他力的教育でないことはここに断つておく。

八 大正十一年・慈光より

(意訳) 天親菩薩「願生偈」

花田正夫

一、礼拝門

世尊我一心 世尊よ、われひとすじに

二、讚歎門

歸命尽十方 ひかり十方にさわりなき
無碍光如来 みほとけに帰命しまつりて

三、作願門

願生安楽国 安楽国にうまれんと願(ね) きたてまつる

我依修多羅 まことの功德をあらわせる

真実功德相 三部の経(みのり)によりまつり

説願偈総持 われ今、願生の歌を誦(ず)し

与仏教相應 おしなべて教のかなめあつめては

世尊のみむねに相應(こたえ) まつらん

四、觀察門

觀彼世界相 ①器世間 清浄
かのみほとけの世を見るに

勝過三界道 迷いの世界とびこえて

究竟如虚空 大空のごときわみなく

廣大無辺際 廣大にしてほとりなし

正道大慈悲 われら永き迷いになれば、弥陀仏は
まさしき道にかないたる

大慈大悲のみこころに

きよきみ国をうちたてて

出世善根生 われらをなべて導(い)れたまう

浄光明満足 きよけきひかり世に満ちて

如鏡日月輪 鏡と日と月の光輪(かがやき)に似たり

備諸珍宝性 みほとけのもとつ願いにかないたる

具足妙莊嚴 もろのみたからあつめてぞ

無垢光炎熾 妙(たえ)なる莊嚴みちみりてり

明浄曜世間 垢(けがれ)なきひかりさかんに

きよくあかるく世を照らします

雨華衣莊嚴 華(はな)の衣(きぬ) 雨と降らしていっ
くしく

無量香普薫 無量の香、あまねく薫(かお)り

仏慧明淨日 み仏を供養しまつるも心のままなり

除世痴闇冥 み仏の智慧明らか、浄き日のごと

梵声悟深遠 くらき世の闇路を照らす

微妙聞十方 み仏の妙(たえ)なる御声、遠く十方にひ
びいて

正覚阿弥陀 人々をふかきさとりにみちびく

法王善住持 その覚者(かくしや) 弥陀仏の

如来淨華衆 法王のよくおさめすべたまうところなり

へだてなく一味のさとり得しめんと

ちかいたまいしみ仏の

淨き正覚(さとり)の華よりは

浄土の聖者(ひじり)生(ま)れ給う

愛樂仏法味 みよりの妙味よろこびて

禪三昧為食 身と心やすらげくしずかなり

永離身心惱 あらゆる悩みなく離れて

愛樂常無間 きよきたのしみ絶えることなし

寶性功德草 浄土にしげる宝の草は

柔軟左右施 やわらかに左右にめぐり

觸者生勝樂 ふるものこよなき楽しみをうけ

過加梅隣陀 かぐわしきカセンリンダ(芳草)にもまさ
りたり

寶華千万種 いろさまざまの宝の華は

あまねく池の水際(みぎわ)を覆い

そよ風、華葉(けよう)をゆるかせば

微風動華葉 ひかり、入り乱れて美しさ得もいわれず

交錯光乱転

交錯光乱転

寶華千種 いろさまざまの宝の華は

あまねく池の水際(みぎわ)を覆い

そよ風、華葉(けよう)をゆるかせば

微風動華葉 ひかり、入り乱れて美しさ得もいわれず

交錯光乱転

交錯光乱転

交錯光乱転

交錯光乱転

交錯光乱転

交錯光乱転

交錯光乱転

交錯光乱転

交錯光乱転

交錯光乱転

大乘善根界

大いなるさとりのきわみ
善根功德みちみちて

等無譏嫌名
女人及根歛
二乘種不生

人みな平等にして、そしりの名すらなし
女人や根欠（かたわ）はいわずもがな
ひくきさとりのももなし

衆生所願樂
一切能満足

諸仏に供養し、人々を導く
われらのねがいなべて満ちたる

故我願生彼
阿弥陀仏国

さればこそ、われひたすらに
かの御国に生れんと願ぎたてまつる。

(回) 衆生世間清淨

(一) 仏莊嚴功德

無量大宝王
微妙淨華台

限りなきみ宝に莊嚴せられし王仏は
微妙なる淨き華のうてなましまして

相好光一尋
色像超群生

相好のひかり、かがやきわたり
尊きみすがた、ならぶものなし

如来微妙声
梵響聞十方

如来の御声、いとまたえにして
こころよく十方にひびきわたる

化仏菩薩日

如須弥住持

衆生に応じて仏身をあらわし
菩薩となりて世を照らし
衆生をはぐくみ、まもること
須弥山の万物を住持するが如くなり

無垢莊嚴光
一念及一時
普照諸仏会
利益諸群生

穢れなき莊嚴のひかりは
一念のうちに前なく後なく
もろもろのみ仏のつどいを照らし
ありとしあらゆる人等をめぐむ

雨天樂華衣

妙香等供養

十方諸仏の大会（だいえ）にいたり
天の音楽、華のきぬ、妙なる御香
雨とふらして、供養しまつる

讚諸仏功德
無有分別心

もろもろの仏の功德たたえては
さらにへたてはなかりけり

何等世界無
仏法功德宝
我願皆往生
示仏法如仏

若し国に仏法の功德の宝なく
むなしき世界あるならば
ねがわくばわれそこに生れて
釈迦牟尼仏のごとくにて
まことのみ法つたえまつらん

同地水火風

みこころは大地のごと、はた
水や火や風や、大空のごとく

虚空無分別

自在にして何者もへだてたまわす

天人不動衆
清淨智海生

ゆるぎなきもろの聖者（ひじり）
きよなる智慧の海よりうまる

如須弥山王
勝妙無過者

みそらにそびゆる須弥山のごと
いともすぐれて、ならぶものなし

天人丈夫衆
恭敬遠瞻仰

すぐれたるもろもろの菩薩たち
み仏をめぐりて仰ぎうやまう

觀仏本願力
遇無空過者

みほとけの本願力を観するに
遇（もうお）うて空しくすぐる者なし

能令速満足
功德大宝海

よくみ仏に帰しまつれば、
大海の如き大功德、すみやかに
行者の身に満ち足らわしめたまう

安樂国清淨
常転無垢輪

(二) 菩薩の功德成就
安樂国はきよらにて、菩薩たち、
たえずけがれなきみ法をのべ

五、廻向門

我作論說偈
願見弥陀仏
普共諸衆生
往生安樂国

われかくのごと願生の歌を説く
仰ぎ願わくば弥陀仏にまみえて
あまねくもろもろの人等と共に
安樂国に往きて生れん。

法語断片

清沢満之師曰く

「まことの安心をしたと思う人は、
如来の仕事盗むな」

一蓮院秀存師曰く

「弥陀をたのむというは、
御たすけの邪魔をせぬことじゃ」

あとがき



た、身にしみることであります。

阿刀田先生の大正十一年の御原稿は当時、仙台の第二高等学校の校長として、将来有為の学生への責任を痛感されての信の上の御表白であります。阿刀田嬢夫人の御好意によりまして掲げさせて頂きました。

千葉崇憲様は、月々琴平町の高塩さん宅で求道会を開かれ有縁の方々と法味を分っていられます。酒見忠勢先生や長岡鶴吉様のお育てをうけられた方です。

天親菩薩の願生偈の意訳は、言葉足らずであります。菩薩が浄土を願われました御心の一端でもお汲み頂ければ幸甚であります。

図書紹介

母性讃仰記

福島政雄著

定価五百円 送料七十円

東京都新宿区早稲田町四二 明文社

振替 東京一四七五八三番

力の限界 (自然科学と宗教)

東昇著

定価四五〇円 送料七十円

京都市下京区正面鳥丸東 法蔵館

振替 京都二七四三番

御案内

毎月第一、二、三、日曜午后一時半、一道会例会。

○市電、新郊通り一丁目下車、東入ル

三筋目左入ル二軒目

毎月二十四日、午前午後、昭和区小橋町。

教西寺、法話会。

○市バス、北山町下車、東半丁。

○市電、御器所通り下車。

定価 半年 二百五十円 (送共)
一年 五百円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二一七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番

郵便番号 四五七

毎年このことでありますが、一月二月は刑務所の印刷部へ入学試験の印刷の仕事が殺到して、慈光の発行がおくれ、皆様方に御心配おかけしておりますが、今年も矢張り非常におくれました、御海容下さい。

近角先生の御原稿は、同朋よ、同志よと呼びあっても所詮は五分五分の根性のわれわれは、利害得失のために理想は崩れて無力化するより外ない世界にあって、慈眼視衆生、平等如一子の仏心のまこと一つがあらわれて、そこに道がひらけることをお教え頂くことであります。

福島先生はお多忙の中を、仏心のわれらの上に建現して下さる有様をイダイケ夫人の救われ行く姿の上に、深くお味わい下さってお知らせ下さいまし

一月と二月と慈光誌の発

送^がおくれまして申しわけありません。実は名古屋の刑場の作業課ですつと印刷をして世間つております。が、毎身ながら入試の印刷が殺到しておりました、おくれました次第であります。悪しからず御諒承下さいませ

慈光社

読者皆々様